

リュブリャーナ大学文学部アジア・アフリカ学科日本研究講座

2000/2001年度 機関報告

1. 機関概要 所在地 Filozofska fakulteta, Univerza v Ljubljani,
Aškerčeva 2, 1000 Ljubljana SLOVENIA
電話 +386-(0)1-241-1446

アジア・アフリカ学科は、1995/96年度にリュブリャーナ大学文学部内に設立され、当初から日本研究と中国研究の2講座が存在する。スロヴェニアでは、両研究分野とも、当学科設立以前はスロヴェニア東方学会の枠内で活動があり、一般向け語学講座やシンポジウムなどを行っていたが、学科はそれらの活動を吸収、発展させている。

2. 日本研究スタッフ

教授	ベケシュ・アンドレイ	Andrej Bekeš
助手	寒川クリスティーナ	Kristina Hmeljak Sangawa
助手兼司書	重盛千香子	Chikako Shigemori Bučar
助手	若野恵	Megumi Moshino
助手	倉品さやか	Sayaka Kurashina
助手	熊谷容子	Yôko Kumagai
助手	小林玲子	Reiko Kobayashi (2001年3月から)
外国語講師	加藤紀子	Noriko Kato

3. 学生数 (2000年10月現在)

<u>日本研究正規</u>		<u>一般向け公開講座</u>	
1年生	53名	初級	約20名
2年生	39名	中級 (後期のみ)	<u>5名</u>
3年生	34名		計25名
4年生	17名		
5年生 (卒論準備中)	<u>19名</u>		
	計162名		

4. 日本研究カリキュラム (数字は週当たりのコマ数、1コマ50分)

- 1年生 現代日本語Ⅰ (講義2、演習5、LL1、表記2)
東アジア史Ⅰ(2)
- 2年生 現代日本語Ⅱ (講義2、演習6)
日本語文法概論(2)
研究方法論Ⅰ(2)
東アジア史Ⅱ(2)
- 3年生 現代日本語Ⅲ (講義2、演習2)
日本文学概論(2)
翻訳入門Ⅰ(2)
古典入門(2)
中国哲学(2)
- 4年生 翻訳入門Ⅱ(2)

東アジア思想史(2)
東アジア文化史(2)
日本語情報処理入門(2)
研究方法論II(2)

選択科目 古典(2)、書道(2)、漢文(2)、イスラム史入門(2)、
日本史特講(2)、日本社会特講(2) ほか

5. 日本語教科書

- 1年生 Sodobni japonski jezik I - prvi koraki (現代日本語I上) FF Ljubljana 2000
守時なぎさ、小林玲子、武田詩子、高木陽子、倉品さやか著
Sodobni japonski jezik I - osnove (現代日本語I下) FF Ljubljana 2001
倉品さやか、加藤紀子著
- 2年生 An Integrated Approach to Intermediate Japanese (中級の日本語)
Akira Miura & Naomi Hanaoka McGloin, The Japan Times 1994
- 3年生 『文化中級日本語III』文化外国語専門学校編 1997

6. 今年度の主な動き

◆2000年10月に紀宮清子内親王殿下がスロヴェニア共和国をご訪問、当学科日本研究をご視察、日本留学経験のある学生とご歓談になった。

集中講義 客員教授として、高橋武智先生(文化・歴史)、青木三朗先生(言語学)、清登典子先生(文学)に集中講義をお願いした。

実習 筑波大学日本語・日本文化学類と同大学地域研究研究科から3月にそれぞれ2人、7月にはそれぞれ1人、日本女子大学文学部から3月と7月に1人ずつの学生が当学科の学生、および学外からの学習希望者を対象にそれぞれ2週間の日本語教育実習を行った。

留学 筑波大学日本語・日本文化学類との協定のもとに、2000年9月に2人、2001年4月に1人、つくばへ1年間留学。

2000年10月に東北福祉大学へ1か月の短期留学4人。

2000年10月より群馬からリュブリャーナ、リュブリャーナから群馬へそれぞれ一人ずつ一年間留学生交換。

2000年10月から日本文部省奨学金の日本語日本文化研修留学生として広島大学へ1人1年間留学。

2001年7月に国際交流寄金日本語成績優秀者研修に1人(3年生在籍)参加。

国際シンポジウム 2001年3月、イタリア、オーストリア、フランス、ポーランド、日本などから日本語学研究者が集まり、リュブリャーナ市の北東にある民宿を借り切って「スコマリエ国際日本学シンポジウム」を行った。

7. 問題とこれからの課題

昨年度までの問題(文学、文化、歴史、事情などの分野は今のところ客員教授の集中講義に頼っていること、学生はもうひとつの専攻も履修しなければならないため、負担が重いこと)も未解決であるが、研究室、図書室が大変狭く、図書や機器が充実するにつれ、大学、および学部からの早急な対応が望まれる。

文責 重盛千香子